

別紙 1 - 1

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	甲	第	号
------	---	---	---	---

氏 名 森下 剛

論 文 題 目

Effect of postoperative doxorubicin administration on ischemic wound healing

(術後のドキソルビシン投与が虚血創に及ぼす影響)

論文審査担当者

名古屋大学教授

主 査 委員

日比 実 晴 

名古屋大学教授

委員

平 田 仁 

名古屋大学教授

委員

秋山 真 志 

名古屋大学教授

指導教授

亀井 讓 

論文審査の結果の要旨

今回、単純切開群と虚血皮弁群のラットモデルを用いて術後に塩酸ドキシソルビシン (DXR) を投与し、単純切開創だけでなく虚血創においても創抗張力を低下させる事を確かめた。統計学的解析では両群共に術後 0, 7 日後までの DXR の投与では control と比べ優位に抗張力を低下させた。DXR、虚血共に対照群と比べ抗張力の回復を抑制させ、両者の相加効果は認められたが、相乗効果は認められなかった。この効果は DXR より虚血の方が大きかった。病理学的検討では術後 14 - 21 日までの DXR の投与では、皮膚の萎縮性の変化と皮膚付属器の退縮を認めた。

本研究に対し、以下の点を議論した。

1. Lawrence らの報告で、ラットの死亡率が 13%程度で許容できる最大限の投与量（経尾静脈投与 8mg/kg）を選択した。この投与量でラットの死亡例はみられず、投与群の体重減少も約 1 週間で回復し、適正な量であったと考えられた。
2. Quirinia ら報告に準じて、虚血創のデザインとして H 型 double flap を使用した。彼らの報告と同様に皮弁の先端のみ壊死を起こし、皮膚付属器の退縮と萎縮性の変化を起こした。本モデルは実際の皮弁の部分壊死に相似していると考えられた。
3. 虚血創に対して DXR を投与すると、切開創に対しての DXR 投与と同様に、抗張力の回復は抑制された。また、抗張力の回復への抑制効果は、虚血創の方が DXR 投与より強かった。
4. 統計学的に抗張力回復の程度で有意差を認めたのは単純切開群、虚血群ともに術後 0, 7 日目までの投与であった。病理学的には術後 21 日目までの投与で両群ともに DXR の影響が認められた。

以上の理由により、本研究は博士（医学）の学位を授与するに相応しい価値を有するものと評価した。

試験の結果の要旨および担当者

報告番号	※甲第	号	氏名	森下 剛
試験担当者	主査	日比野 晴	田 仁	秋山 真志
	指導教授	亀井 譲		

(試験の結果の要旨)

主論文についてその内容を詳細に検討し、次の問題について試験を実施した。

1. 抗がん剤の投与量について
2. 虚血創のモデルについて
3. 虚血創においてもDXR投与の影響はみられたか?
4. 術後の何日目までのDXR投与で影響があるのか?

以上の試験の結果、本人は深い学識と判断力ならびに考察力を有するとともに、形成外科学一般における知識も十分具備していることを認め、学位審査委員合議の上、合格と判断した。